

背景として中國で榮えたと言つてよいが、回鶻勢力が崩壊すると會昌の廢佛に先立つて逸早く禁斷の厄に遭い、以後再び回復しなかつた。ただ祆教に比して漢人の間に根を下すことが深かつただけに、禁斷の後にも名稱を變えて潜かに行われ、社會の一部に永く影響を及ぼした。

第三の景教はいわゆるネストリウス派のキリスト教であつて、本來イラーンの宗教ではないが、正統派から異端視され、迫害された結果、本據をメソポタミヤの地方に移し、次第に東方にその教勢を擴大して、中央アジアから中國にまで到達した。従つて、その過程において多少ともイラーン化を免れなかつたに違いないことは、當然に豫想されるところである。事實、中國に行われたその經典の中には、宗門本來の用語であるシリヤ語とともに中期ペルシア語が使われているし、この宗派の信徒が使用した七曜名の如きも中期ペルシア語のそれに外ならない。

景教が中國に入つたのは六三五年、唐の太宗の貞觀九年のことであり、それ以後の盛衰は有名な大秦景教流行中國碑の誌すところによつて大體これを知ることができが、その信仰が中國在住の西域人ばかりでなく、漢人の間にも相當廣範圍に行われたこと、また中國傳來の當初からその經典が漢譯されて弘法の具に供せられたことなどは注意すべきところである。その信徒は一時長安・洛陽を始め、現在の寧夏省方面から四川省の各地にまで見受けられ、その寺院、いわゆる大秦寺もこれらの地方の諸都市に存在したが、やはり會昌の法難に際して祆教と同時に彈壓され、頓にその勢力を失墜した。唐代、殊にその半ば以後には大食人の通商活動に伴つてイスラーム教も中國に入つたはずであるが、當時は未だ廣州などの居留地（蕃坊）に滞在して漢人と混住するような場合が少なかつたためか漢人の間にイスラーム教の廣まつた形跡は全く見られない。